

与謝野晶子短歌の裾野

—『冬柏』『明星』同人三宅雪枝のこと—

岩崎 文人

明治三十四年二月、広島県高田郡丹比村（現・吉田町）に、医師の長女として生を享けた三宅雪枝が与謝野晶子に師事するのは、生前唯一の歌集『雲のかげら』（昭和十九年四月）「あとがき」によれば昭和七年からとなるが、残された三宅雪枝宛与謝野晶子書簡によれば、昭和八年の夏からのことなのである。

昭和八年八月二十二日、与謝野晶子（東京市外井荻町荻窪二一―一九）は、広島市三篠本町二丁目の三宅雪枝に宛てて、つぎのような書信（封書、筆書き）を寄せている。

啓上／旅行など致し、御返事大きにおくれ申候。御作のこと承り候。お急ぎにならずば拝見致し申すべく候。規定は別紙にて御承知被下度候。猶忌憚なき撰び方をも、あらかじめ御諒知被下度候。

／拝具／八月二十二日／晶子

昭和八年八月といえば、与謝野晶子は、『短歌全集』（大正八年）、『詩編全集』（昭和四年）は別として、初の『与謝野晶子全集』全十三卷（改造社）の刊行を一カ月後に控えていた時期であった。むろん、官能的な、絢爛豪華な色彩表現の意匠をまとった、自我解放の歌を高ら

かに奏でた『みだれ髪』（明治三十四年八月）の刊行からすでに三十二年がたち、大正十年十一月に創刊された第二次『明星』も昭和二年四月に廃刊され、サロンのな色彩が色濃いと評される『冬柏』（昭和五年三月創刊）を手がけていた時期である。

この書簡のあと、昭和九年九月一日付と推定される与謝野晶子三宅雪枝宛て書信（封書・筆書き）は、次のようなものである。

啓上／御手紙と共に、御謝儀を頂き申候。さて、御詠草を文化学院へ御送り被下候ことを御手紙にて承知致候へども、学校の休暇中に届き、紛失致候ものと考へられ候。七月七日の御手紙のことは拝見致候へども、御詠草は学校に無之候。いろいろと取調べ候へども、休暇中にて、他の書類に混じり紛失致候ものならんと考へられ候。就ては、御手数ながら、今一度御清書の上、宅の方へ書留にて御送り被下度候。／歌と歌との間を一行ほど明けてお書き被下度候。／前冊の冬柏九月号を拝呈致し候。爾後御購読被下度候。／○／歌をお詠み被下候ことは、まことに私にとりて嬉しきお友達を得たる事と存じ候。只今、世間には凡庸なる歌（実は歌のにせもの）が流行致しをり候ゆゑ、御自愛被下候て、真に永久

の価ある歌をお詠み被下候やう祈上候。御詠草が参り候はゞ、御遠慮なく取捨致し申すべく、あらかじの（め力）御含みおき願上候。御承知のごとく、歌は遊戯に非ず、お互の感情の尤も高きもの、尤も美しくしきものを、金石に彫刻する積りにて、言葉に彫刻致すものに候へば、著想にも、言葉づかひにも、一点のスキマなきまでに御苦心被下候やう祈上候。拜復／九月一日 晶子

ここで晶子は、時代の凡庸な歌の流行を嘆き、「感情の尤も高きもの、尤も美しくしきものを、金石に彫刻する積り」で、「著想にも、言葉づかひにも、一点のスキマ」のない「真に永久の価ある歌」について説いている。ここには、出発期から一貫し、いささかも衰えることのない、短歌にかける晶子の情熱がある、といつてよい。『冬柏』創刊後の昭和期は、与謝野晶子の作歌活動の最も旺盛な時期でもあった（岩野喜久代「与謝野晶子没後五十年以降の研究動向」〈国文学解 釈と教材の研究〉平成十一年三月）。

三宅雪枝のもとには膨大な与謝野晶子の朱の入った歌稿が残されていたということである（三宅雪枝のご息女松子氏談）が、三宅雪枝が残した資料によれば、三宅雪枝の短歌が『冬柏』に最初に掲載されたのは、昭和十年十一月二十八日発行の第六卷第十一号であり、そこには、「頬の指紋」と題された短歌二十九首が載っている。そのはじめ五首をここに引こう。

紅梅の部屋とも変れ秋の夜の寂しきときに赤き帷かきを引く
秋となり女の性のあらはなる木にも水にもよりてなかまし

孟宗の三本餓鬼の踊ること見え十日月暗き冬かな
雲に乗り水の旅する舟人よこれを棄奢と誇れかし月
静より舞たくみなり草とんぼその水干すんかんはさみしけれども

なお、この号の表紙絵は広川松五郎、表紙裏には「抛書山荘にて」「日蓮崎にて」のキャプションの入った与謝野晶子と同人たちとの集合写真二葉が添えられ、与謝野晶子「尾参詠草（一）」「万里莊菊花の日」、小堀杏奴「父上の事」、小金井喜美子「越、上河内その他」等の作品が掲載されている。

以後、三宅雪枝は、『冬柏』同人として多くの詠草を発表していくわけであるが、与謝野晶子との書簡のやり取りが頻繁になっていくのは、昭和十一年六月あたりからである。

啓上／いつも御歌稿にこの月は消息をそへてと心がけながら皆同時に封をいたし候ことゝつひくそのまゝになり申候。おもしろき歌を御見せ下され候ことを私はよろこびにいたし居り候。冬柏が回顧的にならぬやうにと私は念がけ居り候ことに候。本日もうやく原稿をわたしをへ安心いたしたる夜にて候。東京は梅雨に入り候てのち天気美しくなり、怪しかりし脚気もそのためにまた一寸よくなり申候。広島に読者の方はあらんとおもひ候へどもその名簿は近江夫人の方にありて私はしらず候処社友はなく候。近きところと申しても唯だ関西方面と云ふだけのことに候へども、兵庫県加東郡大門町には石井長衛氏、京都市外洛北鞍馬寺に

一は信楽真純氏、阿波は（三字単線にて抹消）徳島市通町には松永周二氏、大阪市住吉区旭町二ノ八八には内野辨子氏、同西区南堀江上通一〇には木村富士子氏、兵庫県芦屋西新田には丹羽安喜子氏など居られ候。また松江市魚町には三崎祥道氏も居られ候。その人人には関西の方としてあなたも何かの時には御招き申さるべしとこの間話してまゐりしことに候。皆よき人人に候。北海道下芦別の西村一平氏もよくあなた様の御うたのことを消息の中に申こし候。／東京へは御いでなされ候ことなきや。私もお目にかゝりたく存じ居り候。／かしこ／十八日（封書。昭和十一年六月十八日消印／ペン書き）

与謝野晶子は、この書簡をはじめとして、いくどか三宅雪枝に会したいと書き送っているが、結局、両者が相まみえることはなかった。夫与謝野鉄幹を昭和十年三月に喪つた晶子は、同年七月、鎌倉帰源院で鉄幹の百力日の法要を、翌十一年三月、一周忌法要を営むが、それ以前に活発に行っていた吟行・小旅行を変わらざる展開していく。たとえば、沖良機『資料 与謝野晶子と旅』（武蔵野書房、平成八年七月）によれば、昭和十一年の旅は、おおよそつぎのようであつた。

昭和十一年

一月 静岡伊豆山温泉、三津。二月 大磯、箱根湯本温泉、吉浜、熱海。三月 伊香保温泉。四月 清水、修善寺温泉、吉浜。四月 千葉鵜原。五月 逗子、芦屋、浜寺、鞍馬、京都。七月 清水、三方が原、浜名湖、熱海。八月 長野上河内、白骨温泉、浅間温

泉。九月 福島長浜、東山温泉、片柳町。十月 軽井沢。十一月 強羅温泉、吉浜、熱海温泉。十二月 鎌倉、逗子。

八月、長野の旅から帰京した与謝野晶子が三宅雪枝に宛てた絵葉書には、

（表）ご勝健にいらせられ候や。昨夜旅より帰宅いたし候。東京の暑気も少しくなりしやうに候。／秋の立ちしるしに候べし。

（裏）のぞまれぬ悪夢の中に逢ふこちするしら骨の芦なる岩の湯（絵葉書〈国立公園 日本アルプス〉。昭和十一年八月十一日消印／ペン書き）

とあり、九月の会津の旅先から投じられた絵葉書は、

啓上 御きげんいかゞに候や。四日より旅にいで居り候がこの夏は眠りえぬ運命に出あひ、歯痛もそのためにおこり頭もわろくてうたが出来申さず候／白虎隊いやはての目に望みたり哀れに城のくすされにけん／森氏が別荘にあり候が池には秋らしくかなせみのとひなき居候（絵葉書〈飯盛山より若松市小田山遠望〉。昭和十一年九月十日消印／ペン書き）

といったものである。

昭和十二年もまた、与謝野晶子は、同じように多くの小旅行をして

いる。この旅のほとんどは『冬栢』同人たちとのそれであつた。
つぎにあげるのは、旅先から三宅雪枝に宛てて出された、同人の短歌寄せ書きを含む絵葉書である。

興津に三日ありて一昨日より清水の鐵舟寺へまゐり居り候。私の家にとつて一つの別荘を老師より貰ひて候へばさくらのおさくころこまでおいでいかがに候や。ふとんなど三組ほどあり候。／梅白く咲けるみてらに仏をば深くはしらでおきふしぞする／のどかなり衆生済度の誓ひなどもため仏にならんとすらん。(絵葉書(国立公園 富士・三津より)。昭和十二年一月十六日消印／ペン書き)

(表) 御機嫌よろしくて、うれしき御手紙を御かき下されまことに幸福をおぼえ申候。／藤子へは菓子たまはり月曜日に熱海より帰る筈に候へばよろこばせ申べくたのしみにいたし候。厚く御礼を申上げ候。御心にかけてさせられ候ことの私はまだ味はねど甘味にみち足らふこゝちを覚え候ことに候。同女が留守になり候てのちまだしらすりし孤独感をおぼえ居り候ことに候。

(裏) これは吉良さんの御里の祭に候。おなじやうでも一つづちがふものによし。(絵葉書(高山祭り)。昭和十二年一月二十五日消印／ペン書き)

(表) ほの白し天城の風の触れたりし掬書の狂の夜来の落花 晶子／紐のやう遠笠山を巻く道も矢笠の襷もあさやけき朝 苔溪／去年のまゝ落葉も清き姿して山の林はずでに芽を立つ ちか子／

さゞ波の小さき声に誘はれて終に落ちたる紅椿かな 綾子／昼と夜の闘ひもなし曇る日の湖水に時の移るきさらぎ たづ子
(裏) 軟かに小室の山の起伏して春雨けぶる鴨啼く池に しづ子
(絵葉書(正宗得三郎画・掬書山荘より観たる朝の大池)。昭和十二年三月一日消印／ペン書き)

大磯の松の花粉の色をしてともしびの気のうごく山の湯 晶子／病気のことあまり御案じなさるまじ／若葉より噴きいづること玉簾の漣のしたたる湯坂山かな つた子／湯坂山玉よりなれるものならでいふべくはこれ銀糸の簾 富士子／海より山へうつりまゐりて夜ぞ眠れと申になり／候(絵葉書(国立公園 箱根)。昭和十二年五月四日消印／ペン書き)

休むとき岩に敷くへき毛皮をば腰にす多摩に木を流す哉 苔溪／弁天の山の奥よりもて来たる鉱泉を嗅ぐ奇を求む如 吉良／今月の御うたをまち候。いろ／病中は御心配を御かけいたし候 晶子／うすぐらきやどやの灯には蛾のよらで白きに來たる紙にも手にも／山々が夜の水音をうとむごと煙霧を抱きて消ゆるなりけり 英猪／掌にふれたる水の冷たきをもて為の風吹き昇り來ぬ 田鶴(絵葉書(奥多摩摩鶴の湯温泉湧出池)。昭和十二年六月十五日消印／ペン書き)

三日ほど近江夫人と旅にいで居り候。／波立てで駒形丸の入りくればホテルの柵へわれも近づく／これより熱海へ山ごえをいたす

べく候。晶子／いづれ皆わが悲しみに関はらじ箱根の山のひと木
ひと草 満子（絵葉書（湯本温泉三枚橋上よりの眺望）。昭和十
二年七月十二日消印／ペン書き）

短歌を寄せ書きした歌人のうち、満子とあるのは、のちに「冬柏」
の編集・発行を手がけることになる近江満子。以下、苔溪（井上苔溪）、
しづ子（島谷静子）、綾子（川崎綾子）、つた子（水野蔦子）、富士子
（木村富士子）、吉良（鈴木吉良）、英猪（池内英猪）、田鶴（浦辺田
鶴子）らである。

昭和十三年の晶子は、齢六十一歳。この年、多くの歌作をはじめ、
『現代語訳平安朝女流日記』（非凡閣、四月）、『新新訳源氏物語』（金
尾文淵堂、十月より翌十四年十月まで）を刊行し、相変わらず旺盛な
筆力を示すが、体調そのものは必ずしも良好ではなかった。四月には
虫垂炎の手術を受け、十二月には肺炎にかかり入院生活を余儀なくさ
れている。が、この年も「吟行が主ではないのですが作歌を旅でせぬ
事は苦痛で常のやうに帖とペンを座右からはなせませんでした」（『冬
柏』消息。引用は前出沖良機『資料 与謝野晶子と旅』による）とい
う晶子は、幾度か旅に出かけている。

以下十三年に三宅雪枝が落掌した絵葉書をあげておく。佳世は中楯
佳世、辦子は内野辦子。

うすく濃く青菜の色を船の塗り浮けば卯月の春のここちす 晶子
／大繩の網場の磯へ二三隻小舟を曳きて寄する親船 苔溪／叱ら
れて猫は逃れどまたも寄る寺の厨の配膳の台 しづ子／山伏の修

行にあらで師と共にわれは二月のあしからをゆく／佳世（絵葉書
（熱海多賀名勝）。昭和十三年二月十四日消印／ペン書き）

（表）御手紙下されありがたく存じ申候。今月は発病の一週年に
も候へば自重いたし旅にもいでぬかくこに候。昨今は気分よろし
く候。二十日はやくまるとのみまたれ候。かまくらの寺へだ
けは一寸まゐるべく候。今年むさし野の春がはやく鶯がしきり
になき候。京にて五月に御目にかゝり申すべく候。くらまへ上り
候前日に木屋町の宿にて一休みいたしたくそのせつは同宿

（裏）下さらばいろく御話も出来申すべく候。学校の試験とか
何とかにて今月は忙しくくらさねばならぬかともおもはれ候。（絵
葉書（層雲峡小函）。昭和十三年三月六日消印／ペン書き）

啓上 御機嫌よろしく候や。先月は御うたのなくてさびしく存じ
申候。私一昨夜伊豆より二泊のたびを了へてかへり候。なほ傷い
ためるまゝ湯のところへとまゐることにて候。やうやく宜しき方
と存じ申候。今すこし時間のあらばよきにとおもひ候。／美くし
き稲生沢川船つきの下四千軒ここは松原（絵葉書。昭和十三年七
月十一日消印／ペン書き）

内野夫人の西へ帰りたまふとともに湯河原へまたまゐり候。／い
と白く冷き霧の集るを瀧と知りぬる夏山の溪／晶子／青菜蔭細き
百千の銀簪のゆらぐと見ゆる奥山の瀧／辦子（絵葉書（伊豆下田
・史跡）。昭和十三年七月二十二日消印／ペン書き）

湯のやかた今朝は山風烈しくて間毎になれり葉おと枝音 晶子／
愁ひなど心の上に涙など積れるさまに夏草しげる 満子／千とせ
川青葉を縫ひて下に鳴り十国峠彼方にけふる 和哥子(絵葉書(湯
河原)。昭和十三年八月四日消印／ペン書き)

与謝野晶子が脳溢血で倒れ病床につくのは昭和十五年五月。与謝野
晶子の晩年、多くの吟行に同行した近江満子が「先生は病ひの如く旅
をお愛しになる。これはお若い頃から御病臥の今日に至る迄一貫した
御趣味といつていい」と記したのは、『国文学 解釈と鑑賞』(昭和十
六年十二月)での「晶子先生を語る」であつた。

与謝野晶子が六十五歳の生涯を閉じ、この世を辞すのは、その翌年
昭和十七年五月二十九日のことである。三宅雪枝に届いた訃を伝える
書面と長男与謝野光が宛てた礼状、形見分けを伝える書簡(いずれも
葉書。印刷)をつぎにあげておく。

母与謝野晶子儀永々病氣の処本日午後四時三十分死去致しました
右御知らせ申上げます

追て来る六月一日午前十時三十分より十一時三十分まで青
山斎場にて仏式により告別式を営みます 猶御供物の儀は
時局柄堅く御辞退申し上げます

昭和十七年五月二十九日

東京市杉並区荻窪二ノ一一九ノ男 与謝野光ノ秀ノ麟ノ昱ノ健ノ
親戚総代 小林政治ノ友人総代 平野万里ノ新詩社同人一同(昭

和十七年五月三十日消印)

拝啓母晶子死去に際しては早速御鄭重なる御弔詞を賜はり厚く御
礼申上候不取敢右迄 草々

昭和十七年六月 日

東京市杉並区荻窪二ノ一一九ノ与謝野光ノ秀(昭和十七年六月五
日消印)

拝啓、炎暑の候愈々御清栄の段賀し奉り候ノ扱白桜院の遺物別封
にて送付申上候間誠に失礼ながら何卒御受納賜はり度御願申上候
敬具

昭和十七年七月

東京市杉並区荻窪二ノ一一九ノ与謝野 光(昭和十七年八月日不
明消印)

形見として三宅雪枝が受け取つたのは、生前晶子が愛用していた濃
い紫色のシヨール。三宅雪枝は恩師の死を悼み短歌七首を詠んでいる。

噫 晶子先生

駆けよりにて縊らまほしや東より来たる雲のみ師の上を知る

鉄舟寺こゝまで来よと励ましてのたまいりし御心を泣く

夜の空に我れ驚きぬいと細く師の御朱にも似たる流星

御遺物抱き涙限りなし薔薇の間うらん何狂うやと

百日を夜毎香焚きぬかづかん師の御集のあつまれる部屋

白牡丹崩るるように果てましぬ清きみ弟子の涙する座に

師の星は「怠る勿れ」彼方より見守り給う銀の眼

三宅雪枝この年四十一歳。与謝野晶子の生前恵与された直筆色紙には、「なのりそを波の中より拾ふより身にかゝはりのあるものゝ如」とあり、石井柏亭の山水画に記された晶子の歌は、「いにしへに榎原の神たてましてゆるぐことなき御大柱」であつた。

高田保馬の序文、近江満子の序歌を得て、三宅雪枝が正宗得三郎装丁による『雲のかげら』を鞍馬寺より刊行したのは、晶子の死から二年のち、昭和十九年四月のことである。「あとがき」末尾の一文に、「この歌集を恩師白桜院晶子先生の御墓前に捧げたいと思ひます」とある。昭和五年三月に創刊された『冬栢』は、与謝野晶子が亡くなる昭和十七年の第十三巻六号まで百四十二冊が刊行され、その後近江満子らの手によつて、途中隔月、季刊などと変則的な刊行状態になるものの、昭和二十七年春季号、第二十三巻まで計百八十九冊が刊行されている（香内信子『与謝野晶子—昭和期を中心に—』（ドメス出版、平成五年十月）による）。この間、昭和二十二年三月、第三次『明星』が創刊され、昭和二十四年十月までつづくことになるが、三宅雪枝は、同人として『明星』に短歌を寄せることになる。

創刊号に掲載されたのは、「秋に散る」と題された、「西行くやひがしに行くや群羊は雲よりすこし秋に濁りて」をはじめとする短歌六首、終刊号には「恋の馬」と総題するつぎの七首が掲載されている。

我心今日新しく脈打てど目覚しきこと春に及ばず

彼の人の聳えたる肩それよりも少し病を得たる山かな

又楽し十日の壺に白薔薇が真珠の如く老いて光れば

あさましき人の世ゆるゑに森に行き纏へる衣脱ぎ捨てて寝む

風のごと花をむしりて大空に駆け入らむかな虹の裾より

人呼べばねぢけ心は横を向くむしろ愛しき人形これは

このままに行かば狂人と我ならん手綱の先の恋の馬とて

瀬戸内の一地方広島で孤独な作歌を試みていたひとりの歌人が与謝野晶子と師弟の交わりを結び教えを受けたのは、晶子の永い文学生活から見れば、わずかの期間といえるかもしれない。が、こうした、短歌に対するひたむきな情熱をもつ三宅雪枝のような歌人たちが、与謝野晶子を中心とする豊かな歌壇を支えたのであり、同時に地方文化の重要な担い手となつたことは、やはり記憶にとどめて置いてよい。

三宅雪枝は、原爆を受けながらも長寿を全うし、昭和五十八年、八十二歳の生涯を閉じたが、最晩年も短歌にかける情熱はいささかも衰えることがなかった。

平成十一年三月、三宅雪枝の十七回忌を迎えるにあつて、長女三宅松子の手により、雪枝の歌人としての人生が凝縮された遺稿歌集『麗人』が創元社（広島）から刊行された。

三宅雪枝宛与謝野晶子書簡の翻刻をお許しただいた三宅松子氏に心よりお礼申し上げます。また、晶子書簡の翻刻にあたり、広島大学大学院助教授竹村信治氏に全面的にご協力いただいた。ここに記し深甚の謝意を捧げます。

（いわさき ふみと、広島大学大学院教授）